

## 地下活動に“ひげ根”を生やす

山下 浩志

茂田さんと共に過ごし、語り合った時間の多くは、彼の爆取で指名手配後のことでした。私と連れ合いが、ささやかな財政的基盤によって、彼を支える役割を担うようになってからでした。それまではあまり付き合いもなく、どういう人かよく知りませんでした。

1974年から2年間、私は埼玉の、ある団地自治会の生協の、非常勤職員として働いていました。その縁で障害児の親たちの会、「総合養護学校をつくる会」を手伝うことになります。その会は子供が保育所や、施設などに行っている時間帯に、いつも母親だけで開かれ、ハコものづくり中心の活動であることに、少々疑問を抱いていました。その時出会ったのが、同じ埼玉の「川口に“障害者”の生きる場をつくる会」の人達でした。

そして1978年、現在まで続いている“わらじの会”を結成します。当初は、家の奥に閉じこもっている重度障害者、「総合養護学校をつくる会」、市職員組合の青年婦人部などが主たるメンバーでした。そこに地域の住民有志や、学生ボランティアが応援に来るという形でした。「街へ一緒に出よう」という行動を積み重ね、みんなで迷い、悩みをぶつけあいながら生きてきました。その経過を、会うたびに茂田さんに、具体的に話していました。それが彼の気持ちに、何か変化を生みだすことになったのかも知れません。

1989年、千葉の墓会所で、“小林”という偽名で働いていた茂田さんは、松戸市の「喜楽家」という障害者の通所施設に、ボランティアとして関わることになります。この「喜楽家」と埼玉の「わらじの会」は、以前から付き合いがありました。親と障害者本人が、立場の違いを踏まえながらも、一緒に働いて地域を変え、自治体を変えて来たという点で共通しており、その点を茂田さんに伝えました。

私自身が学生時代に、過激派として活動していたことは、「わらじの会」では包み隠さず話していました。当時はまだ余廻くすぶる状況が残っており、私も「いつ捕まるかも…」などと口走ったりしていたものです。その一方で、1988年、知的障害児の高校入学を求めて、埼玉県知事室に3~4日居座ったりしました。警察の介入を許さず、県の管財課職員によるゴボウ抜きを撃退し、教育長との対話集会を勝ち取ったこともあります。学生運動の経験が、少し役に立つこともありました。マスコミを含め大衆的背景があれば、権力側もそう簡単には、介入できないものだということを実感したものです。こうした運動を、そのまま茂田さんに伝え、地下生活を続けながらも、障害者が街で生きる活動に関わり、“ひげ根”を生やす可能性もあるのではないか。そんなことを二人で語りあっていたものです。一旦、障害者運動に参加し始めると、オルガナイザーとしての茂田さんの活躍は、驚く

べきものでした。当時の障害者運動では、70～80年代の全障研（発達保障）か、全障連（反差別・障害者解放）かという路線対立の時代が終わり、後者を選択する中で、具体的な個別課題に特化して、組織化・制度要求を進める分野別の運動が広がりつつありました。それがJIL（自立生活センター）、要求者組合（介護保障）、共同連（共働事業所）です。

茂田さんのやり方は、出会った障害者と一緒に、それら全ての所に出かけ、関係を拡げ、自治体との交渉に取り組んだのです。「わらじの会」の障害者や支援者たちは、これらの全国組織の集会や、中央省庁との交渉の場で、時々“小林さん”に出会い、言葉を交わし、面白い人だと私に報告してくれました。

厚生省交渉では、最後部から、官僚に怒声を浴びせかけていたと聞いた時は、「あまり目立たないように」とブレーキをかけたこともあります。「そうだな」と答えますが、態度や姿勢はかわりません。1997年茂田さんは、地下生活24年目で、とうとう逮捕されますが、証拠不十分で間もなく保釈されます。その時、自立生活を支える、介護保険制度が千葉でも成立し、彼の釈放を祝ってくれました。

障害者の運動に参加し始めてからの、茂田さんの獅子奮迅の活躍は、まさに彼の本領ですが、当時の情勢も味方しくれたのだと思います。90年代、重度障害者の居場所は、家の奥か、施設の壁の向こう側に限られ、そこから徐々に街に出ようともがいていた、いわば「夜明け前」の状況だったのです。現在のように多様な制度を獲得している「真昼間」の状態の下では、彼の「地下活動」からの取り組みは、違ったものになっていたかも知れません。茂田さんは墓会所時代、既に「地下活動に“ひげ根”を生やす」ことに着手しています。これからの時代、彼の遺志を受け継いで同じように、「地下活動に“ひげ根”を生やす」ことを目指すのは無理なのかどうか…。

この「ひげ根」というのは、単独で孤立しているのではなく、深まりゆく差別構造によって、分け隔てられ孤立を強いられている人々が、他と関わり合うために、のびてゆく「ひげ根」でもあります。後に茂田さんは、ある種の障害者たちの態度に幻滅させられることになりますが、今いえるのは、エゴや現世のしがらみを引きずりながらの、生の現場に生える「ひげ根」であること。お互いのエゴで格闘し合うことも勘定に入れ、その度に編み直しながら地下に、さらに大きく根を広げていく、「ひげ根」だということです。

いつ何が「地下」なのか、それ自体がわかりにくい時代ですが、だからこそ、茂田さんの闘いに、繰り返し学びたいと思うのです。